

関連図書

離散数学に関する書籍

- [1] J. L. Hein, “Discrete Structures, Logic, and Computability” Second Edition, Jones and Bartlett Publishers International, 2002. かなり分厚い「アメリカらしい」教科書であり、離散構造以外の分野も含んでいる。本講義資料の内容は、この書籍の前半 1/3 程度を縮めたものに相当する。
- [2] R. Haggarty, “Discrete Mathematics for Computing”, Addison Wesley, 2002. 上記 [1] よりだいぶ薄くて要領よく書かれているので読みやすい。
- [3] P. Grossman, “Discrete Mathematics for Computing”, Second Edition, Macmillan, 2002. 上記 [2] と同様に薄くて読みやすい。
- [4] 守屋悦朗, 「コンピュータサイエンスのための離散数学」, サイエンス社, 1992. 本講義資料と同じレベルから、やや進んだレベルまで広くカバーしている。
- [5] 小野寛晰, 「情報代数」, 共立出版情報数学講座 2, 1994. 表題は「情報代数」であるが、前半は離散構造に関する良い入門書となっている。後半は、本講義資料では全く取り扱わなかった代数系の話を取っている。
- [6] 徳永豪, 「工学基礎－離散数学とその応用」, 数理工学社, 2003. 比較的最近出版された本であり、本講義資料で扱わなかった話題が多数載っている。数学的な話が好きな人には大変興味深いだろう。

グラフ、論理など離散数学の個別の話題に関する書籍

- [7] 根上生也, 「離散構造」, 共立出版情報数学講座 1, 1993. 表題は「離散構造」という一般的なものであるが、グラフ理論に特化した内容である。
- [8] 小野寛晰, 「情報科学における論理」, 日本評論社, 1994. 日本を代表する論理学者が、情報科学を学ぶ学生向けにわかりやすく書いた論理の本である。